史編纂所だより

大阪市史編纂所（発行）

〒550-0014 大阪市西区北堀江 4-3-2

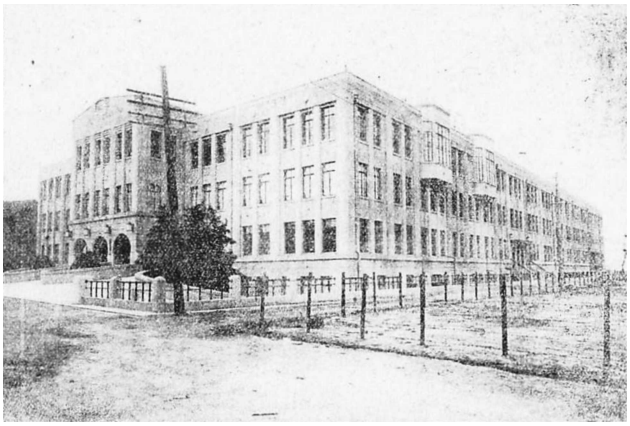
第 59 号

大阪市史料調査会（編集）

大阪市立中央図書館内TEL06-6539-3333

●大阪市立市民病院

大正14（1925）年10月３日、天王寺の「蜜柑山」（現在の阿倍野区旭町一丁目）に建てられた大阪市立市民病院の落成式が挙げられました。この病院は、現在の大阪公立大学医学部附属病院に当たります。落成式には市や府の職員、各病院関係者、報道関係者ら約400名が集い、新たな病院の誕生が盛大に祝われました。なぜなら、大阪市立市民病院は、着想から開院まで足掛け五年を要した待望の病院だったからです（写真）。



大阪市立市民病院
（『大阪市公報』696号、1925年10月３日）

その着想は、大正９（1920）年11月20日の方面常務委員聯合会の席上に遡ります。方面委員とは、大正７（1918）年の米騒動をきっかけに創設された制度で、委員は担当する方面（＝区域）に住む生活困窮者を発見しては「台帳カード」と呼ばれる記録用紙を作成して、その救護に従事しました。各方面にはそれぞれ常務委員と呼ばれる代表者がおり、常務委員は月に一度、府社会課職員や警察署員と聯合会を開き、自らの活動内容を共有したほか、今後の活動方法をめぐって議論をしました。大正９年11月20日、聯合会に出席していた木田新三郎（日本橋方面常務委員）は、以下のように提案しました。

> 私は是迄取扱った患者は可なり多数に上って居りますが、之を特殊病院に収容して貰はうとするとベッドが無い、カードに就て調べると貧民の出来た原因は病気に基くものが八、九分を占めて居るのでありますから、是は最も大切な問題であります。それで此際一つ、府とか市とか云ふ所に我々の方から建議をして、特殊の病院を設けて貰ふ事にしたいと思ひます。
>
> （『大阪府方面委員事業年報』大正９年版）

医療費の払えない生活困窮者のために「特殊の病院」を設立しようという木田の提案は、他方面の常務委員にも賛同されました。すぐに５名の常務委員が「細民病院実行委員会」に選出されて、病院設立に向けた活動が始まったのでした。まず、実行委員は、府知事や市長を訪ねました。そして、生活困窮者の救護に従事してきた自らの活動に基づいて、病気・怪我と生活難が密接に結びついていることを主張したうえで、そうした人々のための病院を設ける必要があると説得しました。実行委員の交渉の甲斐あって、府・市ともにこの建議に賛同し、市は50万円の建設費お

よび設備費を投じることに決定しました。

こうした実行委員のはたらきや市の対応は、当時の新聞紙上に報道されて世間の知るところとなりました。すると、大正11（1922）年10月に、大阪の実業家である岸本吉右衛門が病院建設費として100万円を寄付しました。寄付の趣旨は以下の通りでした。

> 大阪市ノ社会施設ハ近時其ノ見ルベキモノアルモ、本市ノ如キ商工都市ニ於テハ病ムデ薬餌ニ親ムコトヲ得ザル者ヲシテ適当ナル設備ノ下ニ於テ診療シ可及的ニ治療日数ヲ短縮セシメ市民ノ労働能率ヲ高メ以テ生産力ヲ増大セシムルノ施設ハ殊ニ緊要事ナラムト窃ニ思惟シ居リシニ時、恰モ大阪市ハ市民病院ヲ建設シテ上叙不遇ノ患者ヲ治療セラルヽノ計画アルヲ聞キ且余ハ平素薬餌ニ親ム身ナレバ、病院建設ニ就テハ特ニ賛同シ財界不況ノ際ニ如何ガト考慮セシモ此機会ニ素懐ヲ果サムトシ微力ヲ顧ミズ此挙ニ出ヅ。大阪市ニ於テ幸ニ微意ヲ容レラレムガ余ノ大ニ欣懐トスル所ナリ。
>
> （「大阪市立市民病院」、『大阪市公報』696号、大正14（1925）年10月3日）

岸本の寄付を受けて、市は、当初の予定より病院を拡張した計画に変更して、翌年12月に着工しました。こうして完成した大阪市立市民病院は、鉄筋コンクリート造の延坪約4200坪にも及ぶ大病院で、入院・外来ともに500名の患者を収容できるものでした。予算の都合上、無料診療だけでなく有料診療も行うこととされ、当初の方面委員が目指したような生活困窮者専用の「特殊の病院」は叶いませんでしたが、以来、大阪市立市民病院は現在に至るまでのおよそ100年にわたって市民の医療を支えてきたのです。（井ノ元ほのか）

●コレラ流行と大坂

コレラの流行　人類を悩ませた疾病の一つにコレラがあります。コレラとはコレラ菌を病原とする感染症のことです。発病すると消化器系をおかし、短期間で死亡することもある、おそろしい感染症です。コレラはもともと、インドのベンガル地方の風土病でした。世界的な流行は比較的新しく、最初の流行は1817年から1823年にかけて発生しました。日本では文政５年（1822）、九州・西日本を中心に流行しました。

大坂の惨状　文政のコレラ流行では、大坂でも大きな被害が出ました。このときの状況を記した記録に、大槻玄沢（茂質）「文政壬午天行厲気揮霍撩乱病雑記」（『中外医事新報』第1131号所収）があります。同書には齋藤方策の書状が収載されており、コレラ禍に見舞われた大坂の状況を生々しく伝えています。齋藤方策（1771～1849年）は大槻玄沢に師事した著名な蘭方医であり、当時大坂で開業していました。

齋藤方策肖像
（『医家先哲肖像集』国立国会図書館蔵）

> この節、当地は急遽劇迫の流行病これあり、死者夥敷、一日に二三百人葬り候由、その病、初発は泄瀉腹を傾けるがごとし、腹痛、嘔吐、手足の転筋に至る、劇症は一二瀉にて手足厥冷、脈絶え、目上竄致し、旦夕を待ち申さず候、頓に死に申し候、勿論湯薬共に嘔吐して咽み下せず、三時計は死に申し候、十人に一人軽症は薬呑み候いて救れ候もこれあり候え共、多くは死に申し候、
>
> （九月二十六日付　佐々木中澤宛「齋藤方策書状」）

一日に二、三百人もの死者が出る緊迫した状況の中、医師方

策による冷静な病状観察が示されています。病状は激しい下痢に始まり、腹痛、嘔吐、手足の痙攣が見られ、やがて手足が冷え、脈は弱まり、白目をむく。そして短時間で死亡する。湯も薬も嘔吐して受け付けない。発症したら十中八九は死亡してしまうという激しさです。

甚だ恐怖仕り候、一人死に候えばその家二三人死に申し候、已に私西隣には四日の内に五人死に申し候、右に付、膽魂も消へ失せ、家内顔見合せ慄ひ居り申し候ところ、天幸にて先私方は免れ候様存せられ候、（同上）

方策はコレラの激烈な症状や伝染力、身近な人の死に恐怖していますが、他方ではこの未知の疫病の症状を臨床的に詳細に観察し、「普済飲」という処方を考案して試用するなど、医師として大変尽力しています（中野操『大坂蘭学史話』）。「膽魂も消へ失せ…」とは、コレラの恐ろしさを知悉するからこその、方策の正直な気持ちでしょう。

コレラ流行の経路　コレラが大坂に広がる様子は、松浦久功『暴卒病試効』（安政５年成稿）に、以下のように描かれています。

其初、安治川ニテ西国辺ヨリ来レル舟泊セルカ有、其舟中ニ此病者有シヲ宿シタル家、挙家悉此病ニ斃ル、夫ヨリ漸ク広リ処々ニ漫衍ス、但川筋ヲ伝テ流行ス、故ニ浪華西辺最多ク、夫ヨリ嶋ノ内辺ニ広リ、天満・上町ニ及、後ニハ伏水・木津ナト舟ノ着所多シ、

西国船が集まる安治川口から感染が始まり、川筋を通して都市内部に感染が広がっていく様子がわかります。方策も、「安治川辺最も劇しく死人多く候、南安治川四丁目には、五六日前迄五十人死に申し候由、その後も追々死に候」と書状に記しています。

ところで今回のコレラは、一体どこから日本に入ってきたのでしょうか。諸記録を総合すると、どうやらオランダの植民地ジャワ、もしくは中国・朝鮮から対馬を経由して伝播したようです。

コレラがこの時期に世界的に流行したのは、当時における世界の一体化と関係します。イギリスなどの欧米諸国が主導した世界の一体化は、地域的な疫病の流行を、世界的流行に拡大させることにもなりました。世界が繋がるということは、今も昔も、歓迎されざる疫病を世界が共有することでもあります。（中村直人）

●第四師団軍楽隊－市民に愛された西洋音楽の担い手－

「大阪市音楽団」という名をご存知でしょうか。昭和９年（1934）から80年間、日本で唯一の自治体直営楽団として、大阪市民に親しまれたプロの吹奏楽団です。この楽団の母体となったのが、明治21年（1888）３月大阪に配属された、陸軍の第四師団軍楽隊（着任時は大阪鎮台第三軍楽隊）です。第四師団軍楽隊は、フランス人教師のもとで研鑽を積んだ50人からなる楽隊（管・打楽器編成）でした。軍はこの軍楽隊を兵営内の調練や士気鼓舞に用いるにとどまらず、一般の人々にも大いに宣伝しようと考えました。市中の目ぬき通りを行進したり、市内各地に出張しては、運動会、懇親会、舞踏会など様々な場所で演奏しました。揃いの美しい洋服を着こみ、金銀に輝く楽器を操って勇壮な音楽を奏でるさまは、民衆の好奇心を十分に満足させるものでした。行く先々で人々は群集し、西洋音楽は大阪の地に少しずつ広まっていきました。

第四師団軍楽隊の演奏は、明治36年（1903）に天王寺で開かれた第五回内国勧業博覧会（以下、内国博）でも披露されました。本格的な洋楽を出し物の目玉にと企画した主催者の求めに応じ、会期中の５ヶ月間、毎週（25人で交互出演）行われた演奏は、全国から訪れた多くの入場者を楽しませています。

高額な謝礼や入場料をともなう出張演奏と違い、誰でも聴くことができる「公園奏楽」は、大

阪市民に洋楽を広めるまたとない機会となりました。明治45年（1912）、第四師団軍楽隊は、天王寺公園で、第１回の演奏会を開催します。これにともない、内国博の際に使われた奏楽堂（写真）に若干の改装を加え、周囲に200人分の木製ベンチが新設されるなど、野外音楽堂として相応しい舞台が整えられました。プログラムには、ワルツやオペラなどの他に、長唄（ながうた）など日本の俗曲も加えられました。行進曲にアレンジされた俗曲は、さぞ新鮮だったことでしょう。背広の紳士に御婦人方、女学生や中学生、なかには前垂れ掛け姿の人も。雨の中集まったこれら多くの人々を「恍惚（こうこつ）の境に翰翔（かんしょう）せしめた」と、当時の新聞は報じています。

第五回内国勧業博覧会内の奏楽堂で演奏する軍楽隊
（『第五回内国勧業博覧会並観艦式写真帖』大阪市立中央図書館蔵）

第四師団軍楽隊は、その後も洋楽普及活動の一環として各地で野外演奏会を開催していきます。なかでも天王寺公園での毎月３回の公演は、長きにわたって多くの市民に親しまれ、市民と楽隊の関係を一層親密なものにしていきました。

大正12年（1923）、当軍楽隊は、軍縮のあおりを受けて廃止されますが、市民の強い要望を受けた大阪市が第四師団司令部にかけあい、大阪市の助成団体「大阪市音楽隊」として、その歴史をつないでいくことになります（昭和９年より大阪市直営、同21年より「大阪市音楽団」に名称変更。平成25年より公益社団法人に移行）。　（白杉一葉）

刊行物のお求め方法

大阪市史編纂所の刊行物は、大阪市史料調査会で窓口・通信販売を行っています。また、下記の書店でお求めいただけます。詳しくは大阪市史料調査会（大阪市立中央図書館３階・大阪市史編纂所内 ℡06－6539－3333）までお問い合わせください。

取り扱い書店 ―― ジュンク堂書店（大阪本店・難波店）
紀伊國屋書店（梅田本店　※『大阪の歴史』最新刊のみ）

■「編纂所だより」は、年２回発行しています。

さまざまな歴史の話題や日々の活動などを、みなさんにわかりやすくお届けするニュースレターです。
大阪市立各図書館のほか、各区役所、各区民センター、市役所市民情報プラザ、総合生涯学習センター及び各市民学習センター、大阪歴史博物館、大阪城天守閣、住まいのミュージアムなどに置いています。大阪市立中央図書館（３階大阪コーナー）及び各区の図書館では最新号を常備していますので、カウンターでおたずねください。

■大阪市史編纂所では、ホームページを開設しています。

催し物や刊行物のご紹介をはじめ、今日、大阪でどんな出来事があったかを知る「今日は何の日」、全国の図書館に寄せられた「おおさか」に関する質問にお答えする「みんなの質問」など、市域の歴史に関する情報を発信しています。
「編纂所だより」もカラー版で閲覧・ダウンロードしていただけます。ぜひご覧ください。
https://www.oml.city.osaka.lg.jp/?page_id=871 または「大阪市史」で検索してください。

（令和４年10月発行）